時代は織田から豊臣へ
忠臣が伝えた浅井の遺風

なわれ、寛文十二年（1672）に現在地に落ち着いた。

「浅井家はわずか三代、五十年あまりで滅亡しましたが、血脈は残りました。小谷落城のときに脱出した三姉妹の長女・茶々（淀殿）は秀吉の側室になり、初は浅井家の旧主・京極家の京極高次に嫁ぎました。とくに三女の江は徳川秀忠（のちの江戸幕府二代将軍）に嫁ぎ、五女の和子（まさこ）（東福門院）は天皇家に嫁いで後水尾天皇の皇后となったのです」と住職の河合伸泰さんが話す。浅井長政とお市（織田家）の血が徳川家と混じり、今の天皇家にも流れている。東福門院および、その娘の明正天皇の位牌が祀られていることもあり、徳川家からの供養料も下賜されていたという。そう考えると、大名浅井家が日本史に及ぼした影響力を、今さらながら実感させられるというべきか、重みをもって伝わってくる。

本堂内には本尊の釈迦三尊像のほかに武将ゆかりの仏像が祀られる。

秀吉由来の仏像
薬師如来像（やくしにょらいぞう）
像高59cmの像。秀吉が播州（兵庫）から持ち帰ったものと伝わる。経年ゆえの損傷も見えるが、出世してからも長浜を大切に思っていたであろう秀吉の気持ちを伝えるもの。

浅井長政の念持仏で親鸞（しんらん）が自ら刻んだと伝わる阿弥陀如来像（前頁）や、秀吉がもたらしたと伝わる薬師如来像などである。増高は三十～六十センチとそれほど大きくはなく、煌びやかなものでもないが、大名家の栄枯盛衰を語りかけてくるようだ。

境内に亮政・久政・長政の浅井三代の墓もある。この墓も本来はもっと北の延長坊にあり、江戸時代の移転前の場所にあったという。滅亡の経緯を考えれば、墓はそれ以前の小谷城下にあったのだろう。移転を繰り返した墓地は、いまや大名家の墓としてはこぢんまりとして、背景に高層マンションがそびえている。時代の変化を感じずにはおれないが、大都市のような喧騒とは無縁の静寂があり、落ち着いて参拝できた。

浅井家の忠臣・片桐且元が主君長政から託されたもの

浅井家の面影を伝える場所は長浜にもういくつか存在し、小谷山の麓にある「小谷寺」や「実宰院（じっさいいん）」などの寺のほか、もう一つ「五先賢の館」という施設がある。少し迷ったが今回は後者の館を訪ねた。日が落ちかけるころに到着し、館長の佐治寛嗣さんに迎えていただく。

「当館は地元ゆかりの五人の先賢の業績を紹介する施設で、彼らの遺品の展示もしています」

「小谷城本丸の南東に、『千畳敷』と呼ばれる平坦な場所があります。そこに、『浅井三代の墓』と伝えられる三基の墓があります。ぜひ、お参りしてください」と佐治館長。

徳勝寺境内にある浅井三代の墓。右から亮政、久政、長政。寺とともに何度も移転を繰り返している。

浅井久政自刃の刀（伝）

河合住職が特別に拝観させてくださったのは、浅井久政（1526～1573）が自刃に用いたと伝わる刀。久政は浅井家二代目で、天文13年（1544）4月に城内の徳昌（勝）寺において父・亮政の法要を営んだ記録もある。子の長政とともに信長に最後まで抗した。享年49。

尾天皇の皇后となったのです」と住
かに武将ゆかりの仏像が祀られる

業績を紹介する施設で、彼らの遺品の展示もしています」

ここに残されているのが「浅井家三代の守り本尊」と伝わる仏像だ。その名前からもわかるとおり、元々は小谷城内に安置されていた十一面観音像とその脇侍たちだ。実際に見て感じたことは本尊という響きから想像していたより小さなもので、像高三十〜四十センチ程度。いつごろに刻まれたものなのかはわかっていないそうだ。

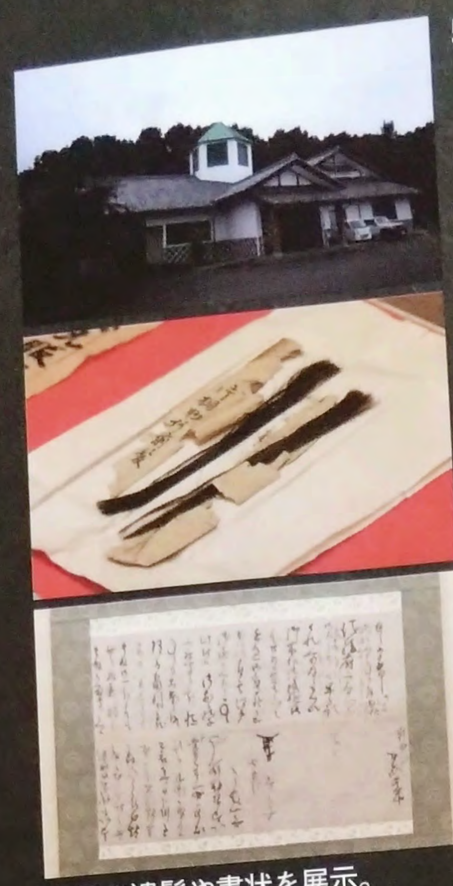
「念持仏で、危急の際に運び出せる大きさに造られたのだと思われます。小谷落城のさい、長政は片桐直貞・且元(かつもと)親子に『皆が見捨てて逃げるなか、最後まで残ってくれたことに感謝してもし尽せない』と記した感状を渡し、この守り本尊を持ち出すよう託したそうです」と佐治館長。

小谷城本丸の南東に、須賀谷(すがたに)温泉がある。そのあたりが片桐且元の出生地と伝わる場所で、今は跡形もないが彼の屋敷もそのあたりにあった。のちに且元はこの自身の屋敷に長政から託された守り本尊を置き、祀ったという。その後、「賤ヶ岳七本槍(しずがたけしちほんやり)」の一人として名を馳せ、秀吉のもとで活躍を続けていくなか、彼の所領も摂津や播磨と西国へ移り、最終的には大和竜田藩を立藩する。江戸時代に長浜は彦根藩(井伊家)の領地となり、浅井家や片桐家の面影は薄れていった。だが明治維新を経ても、地元の人々はそれら旧領主の記憶を宿し、忘れることなく今に伝え続けている。その象徴が且元の伝えた守り本尊なのだろう。

浅井家の守り本尊

落城時、且元の父・片桐直貞が存命していた。城内には浅井三姉妹や大野治長兄弟らもおり、この本尊は彼らの守護仏でもあった。

小谷城跡に近い五先賢の館。片桐且元や小堀遠州をはじめ、先賢たちの顕彰につとめる佐治館長。



且元の遺髪や書状を展示。

賤ヶ岳七本槍の一人
片桐且元 かたぎりかつもと

弘治2年(1556)〜慶長20年(1615)

近江出身の武将。浅井家滅亡の時18歳だった。のち秀吉に仕え、伏見城普請を務めるなど長年にわたり活躍。菩提寺は京都の玉林院。墓は誓願寺(静岡市)にもある。

5人の先人を顕彰する
五先賢の館 ごせんけんのやかた

長浜市の田根地区ゆかりの5人の先人(相応和尚、海北友松、片桐且元、小堀遠州、小野湖山)を展示品と映像により紹介し、顕彰する施設。作庭家として知られる小堀遠州は片桐且元と関係が深い。

滋賀県長浜市北野町1386　TEL:0749-74-0560
開館時間／9:00〜17:00(入館受付は〜16:30)
休館日／水・木曜(祝日の場合翌日休館)年末年始
12月27日〜1月4日　入館料／一般300円ほか
アクセス／JR「河毛駅」より車で15分

石田三成と羽柴秀吉の出会い
大原観音寺とは?

長浜からやや東、滋賀県米原市の西端あたりに建つ観音寺は、石田三成と羽柴秀吉の出会いの地とされる。寺の小僧だった三成が、鷹狩りで立ち寄った秀吉に茶を献じ、その茶の淹れ方に感心した秀吉が三成を引き取ったという逸話が残る。観音寺のやや西に「石田町」があり、そこに三成の出生地の碑や産湯の井戸などもある。

滋賀県米原市朝日1342